

ゲルマン語数詞研究

——十位数と一位数の順序について—— (一)

飯 嶋 一 泰

序章

ドイツ語で会話をしている困難を感じる点のひとつに数詞がある。母語以外の言語によって数を考えることは一般に容易ではないに違いないが、とりわけドイツ語の場合 *einundzwanzig* 「一と二十」式に十位数と一位数がいわば「逆転」するため、思考の流れが分断される気がして、いつまでたっても馴染めない。それでも二桁どまりの数一箇であれば何とかなるが、桁が増えたり、いくつか連続して使われたりすると、困難をきわめる。たとえば、スーパールのレジで「八と四十九マルク、五と九十ペニヒ」などと言われて一遍で理解

できるのはかなり調子の良い時だし、電話番号を「七と三十、三と四十、六と五十」式に二桁ごとに切る言い方に至っては正直言ってお手上げである。

このように、ドイツ語の数詞は、日本語や英語のそれと比べてかなり「不合理」な様相を呈している。しかし、ヨーロッパのいくつかの言語を観察しただけで、日本語などの数詞体系の明快さがむしろ例外に属することが分かる。周知のとおり、フランス語では、六十九までは順調に(？)進むが、七十は「六十・十」(*soixante-dix*)、八十は「四つの二十」(*quatre-vingts*)、九十は「四つの二十・十」(*quatre-vingt-dix*)となる。⁽¹⁾ もっと極端なのはデンマーク語で、六〇

を「三掛ける二十」(tresindstve)、「八十を」四掛ける二十」(firsindstve)と云うのはまだ良いとして、五十を「 $\frac{1}{2}$ 掛ける二十」(halvtredindstve)、「七十を $\frac{1}{2}$ 掛ける二十」(halvfjerdindstve)、「九十を $\frac{1}{2}$ 掛ける二十」(halvfemsindstve)などと言う。⁽²⁾

・数詞体系にこのような「不合理」が見られるのは何故か。この問いに対する答えは言語の通時的考察によらずして得ることはできない。なぜなら、これらの体系は、原初的な物の数え方から出発した言語共同体が、その長い歴史において徐々に拡充しまた改変していった数概念の集積にはかならないからである。

印欧語族はもともと十進法の数詞体系を有していたものと考えられている。⁽⁴⁾ 実際、これに属する諸言語は、一から十、そして百を表わす基数詞に関しては、他の諸語族に見られないほぼ完全な対応を示している。しかし、これら以外のいわば複合数詞は、語派・言語ごとに多種多様であり、統一的な原形に還元することは不可能である。それだけに、この領域は通時的数詞研究にとって興味深い対象であるとも言える。小論は、

その一端として、冒頭に挙げたドイツ語の数詞二十一〜九十九における十位と一位の「逆転」現象を、ゲルマン語史の流れの中で位置づけようとするものである。

一 現代ゲルマン諸語における二桁数

まず手始めに、現代のゲルマン諸語の数詞二十一〜九十九における十位と一位の順序を概観してみたい。雅語・方言等特殊な形を度外視すると、おおむね次頁の表のような状況となっている。

いわゆる大陸西ゲルマン語(フリジア語・イディッシュ語)において「一位十位」が支配的である点を除くと、かなりバラツキのある分布と言えよう。特に北欧語(アイスランド語・スウェーデン語)相互間における不一致が目につく。このような分布が如何にして生じたかは、にわかに想像しがたい。そこで以下に、各言語(語群)の二桁数の在り方を時代毎に調査し、その変遷を跡付けてゆきたい。そして、もし可能であれば、いずれの形式がゲルマン語本来のものであるかを探り出したいと思う。

	「十位+一位」	「一位+十位」
アイスランド語	+	-
フェロー語	(+)	+ +
ノルウェー語	+	+ + +
デンマーク語	(+)	+ + + +
スウェーデン語	+	+ + + + +
英語	+	+ + + + + +
フリジア語	-	- + + + +
オランダ語	-	- + + + + +
アフリカーンス語	-	- + + + + + +
ドイツ語	-	- + + + + + + +
イディッシュ語	-	- + + + + + + + +

二 ゴート語における二桁数

ヴァンダル・ブルグントほかの東ゲルマン諸部族の言語が固有名詞などを残すのみであるのに対して、ゴート語はかなりの量の資料を伝えている。その大きな部分を占めるのが、西ゴート人司教 *Wulfila* (三一〇一?~三八三) が訳出した聖書で、新約のおよそ半分

とネヘミヤ記の断片が現存する。そして、このほかにも *Skeireins* と呼ばれるヨハネ伝註解の断片(五世紀?)など、いくつかの小文献が伝えられている。ゴート語は現在伝わるゲルマン語資料としては圧倒的に古い時代に属する(他のゲルマン諸語は、ルーネ碑文等を除くと、早くとも八世紀ころから伝承されているにすぎない)ため、数詞研究にとっても貴重な情報源であることに疑いはない。しかし、残念なことに、ここではたいていの場合数詞はゴート文字による数記号(いわばゴート数字)で表示されている⁽³⁾。つまり、

・ b・「1」・ kb・「2」¹⁾・ skb・「3」²⁾
 といった具合である(すべてローマ字に転写した)。特に二桁以上の数にあっては、単語として表記されるのはかなり稀である。一部が数記号で表されているものも含めて、我々の考察の参考になりうるのは、*Wulfila* 聖書中の次の数例のみであろう。

spaurde・k・jah・e・「二十と五スタディオ」

= *stadiouz efkour nêurte* (Jh 6, 19)

・ e・jah・k・daga「五と二十番目の日」

- = *πέντη καὶ εἰκάδι* (Neh 6, 15)
 - jer • 1 • jah anbar 「三十と二番目の年」
 - = *ἑξῶς τριακοστού καὶ δευτέρου* (Neh 5, 14)
 - n • dage jah • b • 「五十の日と二」
 - = *πεντήκοντα καὶ δύο ἡμέρας* (Neh 6, 15)
 - jere ahtautehand jah fidwor 「八十と四年」
 - = *ἑξῶν ὀγδοήκοντα τεσσάρων* (Lk 2, 37)
 - niuntehand jah • h • 「九十と八」
 - = *ἑνεήκοντα καὶ ὄκτω* (Neh 7, 21)
 - niuntehand jah niun 「九十と九」
 - = *ἑνεήκοντα ἐννέα* (Lk 15, 4)
 - niuntehandis jah niune 「九十と九」
 - = *ἐνεήκοντα ἐννέα* (Lk 15, 7)
- 上記のうち「一と二十」型を示しているのは、二番目の例のみで、他はすべて「二十と一」型となっている。しかし、いずれのケースにおいても十位数と一位数の順序はギリシャ語原典と完全に一致しており、Wulfiaの翻訳が一般に原典に忠実であることも併せて考慮すると、多数派の「二十と一」型を以てゴート

語本来の方式であるとはにわかに認めがたい。四例において、原典にないjah「と」(kal)が現れていることから、この接続詞の使用をゴート語固有のものと考え、これは或いは可能かも知れないが、十位数と一位数の配列に関しては解答を保留せざるを得まい。また、これらのいわば加算的表現のほかに、減算法の例として fidwor tiguns ainamma wanans 「一を欠く四十三十九」(2K 11, 24)があるが、これも原典の *τεσσαράκοντα παρὰ μίαν* の直訳であり、ゴート語本来の言い回しか否かは判断できない。ゴート語が二桁以上の数表現に関する資料を質的・量的に十分な範囲で伝えていないのは返すがえすも残念である。なお、いわゆるクリミアゴート語(十六世紀)⁽⁶⁾は端数のある二十以上の数詞を伝えていない。

三 古アイスランド語における二桁数

本章では、サガ・エツダ・スカルド詩といったオリジナリティーのある諸作品を残し、古北欧諸語の中でも言語学的・文献学的に最も重要な言語である古アイ

スランド語の状況を調べてみたい。⁽⁷⁾

古アイスランド語における端数を持つ二桁数の形式のうち比較的良く観察されるのは「一と二十」型で、たとえば *fióra ok tuttugu menn* 「四と二十の男たち」(*Njáls saga* 69, 6) となる。その際、しばしば *IV vetr ok XX* 「四の冬(年)と二十」(*Kristni saga* 14, 4) のように、名詞が間に割って入る。また、それぞれの数詞の後に名詞が置かれ、*eitt skip ok sjau tigu skipa* 「一艘の船と二十艘の船」(*Cleasby/Vigfusson* 21957, S. 629 所載の例) ともなりうる。従って、同じ「一と二十」型でも、現代ドイツ語の *einundzwanzig* と比べて、はるかにゆるやかな結合であると言えよう。なお、年齢に関しては、前置詞 *um* を用いて *hann hefir 8 vetr um tvítugt* 「彼は二十を八越す冬を持っている(二十八歳である)」(*Fritzner* 1973, Bd. 3, S. 736 所載の例) という表現も可能である。

一方、「二十と一」型も古アイスランド語期から例証されている。たとえば *beir vāru XX ok þrír* 「彼らは二十と三人であった」(*Háls saga ok Hálsfreakka*

10, 6)。特に、三桁以上の数の場合、*XI hundruð vetrá XL ok einn vetr* 「十一百の冬・四十と一の冬(千四百一十一年)」(*Hungryaka* 15, 8) のように、この型が好まれたかも知れない。また、*XXX ára ok VI ár* 「三十年と六年」(*Kristni saga* 17, 4) のように、十位数と一位数にそれぞれ名詞を付す型も見受けられる。

次に、古アイスランド語特有の「x番目の十のy」と言う形式にも触れねばならぬ。たとえば、*sjan vetr ens sjáunda tigar* 「七番目の十の七の冬」(*Laxdoela saga* 78, 3) は「六十七の冬」を意味する。つまり、「六十七」は「六十」と「七十」という二つのいわば閾 (*Schwelle*) の間に位置する数値であるが、これを通例我々が行なっているように下の閾に基づいて表示するのではなく、上の閾に拠って示しているのである。Menninger (1958, Bd. 1, S. 88) はこれを *Oberschwellenzählung* ならぬは *Oberzählung* と呼んでいる。⁽⁸⁾ この用法はかなり広く普及していたようである。Cleasby/Vigfusson (1957, S. 630) にも十指に余る用例が収録されている。

古アイスランド語には、上記のほかに、端数付き二桁数のなおいくつかのパターンが観察される。端数「五」を持つ数は、*hálf þrjú togr manna* 「 $\frac{1}{2}$ の十(二十五)の男たち」(Laxdæla saga 68, 8)、『つまり「*driðhalb mal zehn*」のように表すこともできる⁽⁹⁾。

また、*tylf* 「十二」を単位とする乗算による *Brennar tylfir manna* 「三つの十二(三十六)の男たち」(Egils saga 56, 42)、『さらには *half fjórða tyfpt* 「 $\frac{1}{2}$ の十二(四十二)の者たち」(Njáls saga 144, 46)、『つまり「*vierthalb mal zwölff*」等めしはしは見られる⁽¹⁰⁾。減算式の *einne nótt miþr en þrimr tegom* 「三十より一少ない夜(二十九夜)」(Heusler 1967, S. 86所載の例)は、ラテン語の *undeviginti* 「二十マイナス一(十九)」、『ギリシヤ語の *δωδεκάς τετρακόβια* 「二を欠く三十(二十八)」等と比較しうる。減算式は、上述の *hálf þrjú togr* 式と併用されることも可能で、*Þa vas hann vetre miþr, an hálfsættgr* 「その時彼は五十五に一冬(歳)足りなかった」(Íslendingabók 10, 12)等の例証がある。

以上概観してきたように、古アイスランド語における端数付き二桁数は実に様々なパターンを示している。しかも、検討してきた諸例は、大半が十二〜十三世紀の散文(サガ)からのものであり、雅語や詩的バリエーションといった特殊事情に帰すことは必ずしも妥当ではない。むしろ、十二を単位とする算法や *Oberschwellenzählung* などは民間に流布した物の数え方の反映と見るべきかも知れない。いずれにせよ、同一の数に対していくつもの表現の仕方が並存していたことはまぎれもない事実であって、我々にとっての問題はいずれが中核的な数表現であったかということになる。今回の調査においては、資料の時代的・数量的分析が不十分であるため、決定的な解答を出すことはできない。ここでは、現代アイスランド語の「二十と一」型が、古期においては決して支配的な形式ではなく、「一と二十」型や *Oberschwellenzählung* が少なくとも同等の勢力を持つ *Konkurrenten* として存在していたことを確認するにとどめる。

四 近代北歐諸語における二桁数

本章では、近・現代北歐諸語における二桁数の状況を、西から東へと順を追って見てゆく。

北欧語中最西端に位置する現代アイスランド語は、ゲルマン諸語のうちでも最も複雑な文法体系を保持しているアルカイックな言語であるが、こと二桁の教詞に関しては、前章で述べた多様性をほぼ完全に喪失し、もっぱら *tuttugu og einn* 「二十と一」といった「合理的」な方式を取っている。つまり、接続詞「と」が入り分ち書きとなっている点に多少の古風を残しているが、配列に関しては英語などと同じということである。この「二十と一」型以外には、古語の *halfr þrjútoztu* に由来する *hálfþrjútoztu* 「三十五歳の」等や、*hann hefur þrjú um tvítugt* 「彼は二十歳を三つ過ぎている」等の年齢表現が見られる程度である。⁽¹²⁾

アイスランドとスコットランドの中間に位置するフェロー諸島で話されるフェロー語は、北欧の西方グループに属する言語（方言群）であり、同グループに属

するアイスランド語に次いで古風な特徴を備えている。同諸島は、一三八〇年以来デンマークの統治下にあるため（一九四八年以降自治領）、長期にわたってフェロー語・デンマーク語の二言語併用が存続し、特に学校や官公庁ではデンマーク語が使用されてきた。その結果、フェロー語には語彙借用をはじめとしてデンマーク語から受けた様々な影響が観察される。この影響は教詞にもおよび、序章で述べたデンマーク語の二十進法的教詞が、*hálftrýsinstjúgu* 「五十」、*trýsinstjúgu* 「六十」、*hálfvæmsinstjúgu* 「七十」、*fyrsinstjúgu* 「八十」、*hálfvæmsinstjúgu* 「九十」として受けいられている。⁽¹³⁾

この種の表現がフェロー語本来のものでないことは、*Svabo*（一八二四年没）の十八世紀末の語彙集に、伝来の *fanti* 「五十」、*sexti* 「六十」等々のみが記録されていることから分かる。しかし、十九世紀末の *Hammershaimb*（一九〇九年没）のアンソロジーには、すでにデンマーク式が一般的であると述べられている。⁽¹⁶⁾ *Braunmüller* (1991, S. 235) は、このデンマーク式の移入の時期を十九世紀末に想定しているが、

Hammerstambの証言を考慮すると、その時期はもう少し早まるのではなからうか。Lockwood (1977, S. 64)によると、今日でもデンマーク式の数詞が一般的であるが、放送などを中心に、北欧語本来の *finti* 等を復活させようとする動きもあるとのことである。

ここで、我々の主たる関心事である端数付き二桁数に目を向けてみると、デンマーク式の場合は *ein og halvtvåsinstitugu* 「一と五十」の順序となり、従来の形式の場合は逆に *finti ein* 「五十一」の順となるのが規則であると言う (Lockwood, a. a. O.)。しかし、後者の規則が比較的近年のものであることは、フェロー語訳新約聖書(一九三七年)に一方で *níggju og níti* 「九と九十」(Mt 18, 12) 等が、他方で *sjuti og fimn* 「七十五」(Apg 7, 14) が用いられていることからも理解される⁽¹⁶⁾。この点においても、フェロー語は隣接するアイスランド語と異なる様相を呈している。

現代ノルウェー語にはブークモール (*bokmal*) と ニューノシユク (*nyorsk*) の二つの文章語が存在するが、ここでは多数派のブークモールに関して見てゆく

ことにする。ブークモールは、一三八〇年から一八四四年に至るデンマークとの同君連合の時代にノルウェーの文章語の地位を占めていたデンマーク語を基礎とし、十九世紀以来漸次ノルウェー語的要素を加えて育成されてきた言語である。従って、デンマーク語の知識さえあれば難なく読むことができるほどデンマーク語に似ている(発音は別)が、こと(端数の無¹⁷)二桁数に関してはその影響を基本的に免れている。つまり、序章に述べたような二十進法的数詞ではなく、ノルウェー語本来の *tue* (tyve) 「二十」*treiti* (tredve) 「三十」*fórti* (fórr) 「四十」*femti* 「五十」*seksti* 「六十」*sytiti* 「七十」*atti* 「八十」*níti* 「九十」を用いている(カッコ内の *tyve* 等はデンマーク語的語形)。次に、問題の端数付き二桁数であるが、これはデンマーク語と同じく *enogtyve* 「一と二十」式の配列となる。Braunmüller (1991, S. 135) は、この形式をデンマーク語から受け継がれた (*überkommen*) ものと同じに見なしている。驚くべきことに、一九五一年の国会 (*Stortinget*) において、このような二桁数を *túeen*

「二十一」のごとく「合理的」配列に直す決議がなされたと言う。しかし、今日なお「一と二十」式が年配の人々やインフォーマルな言葉使用においては根強く生き延びているそうである (Braunmüller, a. a. O.)。我々から見ればきわめて馴染みにくい「一と二十」式であるが、これで生まれ育った人々は、この習慣をやすやすと改めることはできないのであろう。

デンマーク語は序章でも触れたとおり特異な二桁数十進法的数詞に取って代わったものである。この間の事情を Skautrup (1947, S. 95) は次のように叙述している (角カッコ内は論者の註記)「複合的数表現五十・六十・七十・八十・九十には、おそらくカルマル同盟時代〔一三九七〜一五二三〕に二十を単位とする数え方が浸透した。これは初期中デンマーク語〔一一〇〇〜一三五〇〕ではユトランドの資料に観察することができる (フレンスブルク市法〔写本一三〇〇年頃〕: *fyrsin tjuge*〔四掛ける二十〕)が、東デンマーク方言においては十進法的数え方が支配的であった (シエラ

ン教会法〔写本一四〇〇年頃〕: *syvtyugh* = 七十)。

初めは *sinde*-(*sinds*-)〔掛ける〕による構成は十進法的表現に適用され (たとえば *Gesta Danorum* では *threyghæ*〔三十〕が *Stockholm A67* 写本〔十五世紀初頭〕に、一方 *thrysentugh*〔三掛ける十〕 = 三十が *Stockholm B 77* 写本〔同時期〕に見られる〔中略〕、その後叙上の数〔五十〜九十〕における十進法的数え方が導入されたのである。〕このような数え方の起源を、*Hammerich* (1966, S. 11) は中世後期のエーレ海峡における鯨漁とその売買に求めている。

この時代以来今日に至るまで、デンマーク人たちは頑に二十進法を守っているが、現代では序章に挙げたような本来の長々しい語形はあまり好まれません。 *sindstve* の最初の *s* だけを残した短形 *halvtreds*〔五十〕、 *tres*〔六十〕、 *halvfjerd*s〔七十〕、 *firs*〔八十〕、 *halvfems*〔九十〕が日常的に用いられている。 (17) こうなると、特に *tres*〔六十〕と *tre*〔三〕、 *firs*〔八十〕と *fire*〔四〕が酷似してきて、外国人にとってはますますもって手に負えない。さて、これらの二桁数に一位数が付

加される場合、「一位と十位」の型になるのが今日の原則であるが、この原則が必ずしも例外を許さないものでなかったことは、たとえば一五二四年にヴィッテンベルクで刊行されたクリスティアン二世聖書に少数ではあるが *halfemsende tuge oc ny*「九十と九」(Lk 15, 4) や *fyre tuge oc sex*「四十と六」(Jh 2, 20) といった例証が見られることから分かる。いずれの配列がデンマーク語本来のものであったかについては、特に古デンマーク語の資料を広範囲に調査してからでないとも言えないが、古アイスランド語の事例を考慮すると、いくつかの方式が並存していたのではないかと思われる。なお、近年特に金融・通信などの分野において、北欧語本来の *femti*「五十」、*seksti*「六十」、*syvti*「七十」、*ottí*「八十」、*níuti*「九十」が使われることがあり、その際には *femtien*「五十一」のごとく十位が一位に先行すると言う。しかし、この種の表現は一般にはほとんど浸透していないらしい⁽¹⁸⁾。

最後に、デンマーク語とともに北欧語の東方グループに属するスウェーデン語の状況を見てみる。ここで

は、不思議なことに、北欧諸語の西端に位置するアイスランド語と同じ「十位十一位」の順序がもっぱら用いられている。しかも、接続詞 *och*「と」も入らず、続け書きで *tugoen*「二十一」といった形になる。他の北欧諸語における混沌を概観してきた目にはいささか物足りないくらい「合理性」であるが、学習者にとって何よりの福音ではある。ただし、この合理性もスウェーデン語本来のものではなかったようである。たとえば、Noreenの簡略な古スウェーデン語読本を一瞥しただけで、*pre wintær oc tyghu*「三つの冬と二十」(S. 15, Z. 24) / *síw simom och síwtígi*「七度と七十」(S. 105, Z. 14f.) といった配列を見出すことができる(十四～十五世紀の例)。いつから今日の規則が確立されたかを究明するためには、正反対の発展をとげたデンマーク語の場合と同様、十分な量の資料にまず当たってみなければならぬ。

(続く)

(1) *quatre-vingts* は二十進法に基づく数え方である。

この種の数詞は、ラテン語から受け継いだ十進法的数

詞と並行して、古フランス語期から例証されている。かつては三百六十までの数がこの方式で表され得たが、徐々に廃れ、今日のような状況に至ったと言う (Meningier 1958, Bd. 1, S. 78 ff.)。この二十進法的数詞の起源に関しては、ケルトの言語基層やノルマン人の影響など諸説の一致を見ない。なお、ベルギー・スイスなどでは、七十・八十・九十に対してラテン語起源の *septante*, *huitante*, *nonante* が用いられる (*huitante* はスイスの一部のみ) が、我々にとってはこちらの方がはるかに馴染みやすい (Price 1992, S. 464)。小学館仏和大辞典によると、ベルギーの成句に *employer des mots à quatre-vingt-quinze* 「癡りに癡った表現を用いる」というのがあるそうだが、まさに我が意を得たり! である。

(2) これも二十進法的表現で、たとえば五十を表す *halvtredsindstyve* は、ドイツ語の *drithalb* 「 $1\frac{1}{2}$ 」にあたる *halvtredje* と *tyve* 「二十」(元来「十」の単なる複数形) を *sinde* 「回」で結んだものである。従って、泉井 (1978, S. 214) が *halvtredsindstyve* と切っているのは誤りである (早稲田大学教授森田貞雄氏の指摘)。これらの数詞はフェロー語にも移入されている (小論第四章参照)。ゲルマン語における他の二十進法的数表現 (数単位) としては、一、英語の *score*

(中英語 *score* へ「計算のための刻み目」)、二、ドイツ語の *Stiege* (中低ドイツ語 *stige*) やオランダ語の *stijg* (中オランダ語 *stige*) など (語源不詳)、三、デンマーク語の *snes* やノルウェー語の *sneis* など (へ「切り取った枝」) が挙げられる。このうち二はクリミアゴート語に *stega* 「二十」として例証されているほか、スロヴィンツ語 (ポーランド語のポメン地方の一方言) やボラブ語 (十八世紀前半までヘルベ流域 Drawehn 地方で話されていた西スラヴ語) にも借用され、たとえば後者では *stijg* 「二十」、*patstide* 「五」の二十 (百) として記録されている (Suprun 1987, S. 64 f.; Comrie 1992, S. 772 f., 780-782)。

(3) 「不合理」と言っても、それは今日我々が親しんでいる十進法、そしてアラビア数字による表記法の立場からの判断に過ぎないことを、ここで確認しておく。

(4) 十進法以前に四進法等の前段階があったとも想定されている。Schrader (1929, S. 671) は、*Menninger* (1958, Bd. 1, S. 33 ff.) を参照。

(5) ユート文字による数記号に関しては、Braune/Ebbinghaus (*1973, S. 11) 等を参照。

(6) クリミアゴート語に関しては Scardigli (1973, S. 243-265) を参照。

(7) 古アイスランド語以外の古北欧諸語に関する研究

は、手許の資料(一次・二次文献とも)が不十分のため、今回は見送り、第四章において必要に応じて言及するにとどめる。

(8) 類似の現象は現代ドイツ語の時刻表現にも見られる。つまり、「二時半」のことを *halb drei* と言ったり、地域によっては二時十五分・四十五分のことを、それぞれ *Viertel drei* として *drei Viertel drei* と言ったり、これらのうち、「半」による表現は他のゲルマン諸語やスラヴ諸語にも存在する(チェコ語には「1/4」による表現もあると言う)。このような言ひ方が *Viertel zur drei* のような減算的表現(註11参照)とは画然と異なるものであることを、念のため確認しておく。

(9) ここに用いられている「帯分数」*halfr þriðji* は本来「三番目の半分の」であり、ドイツ語の *dritthalb* やデンマーク語の *halvtredsindstyve* 「五十」の *halvtredje* (註2参照) とともに、一種の *Oberschwelvenzählung* と見なすことが出来る (Menninger 1958, Bd. 1, S. 90)。

(10) 「十二」を用じた加算的表現としては、*tolf ok þriggja* 「十二と三(十五)」(Þjóðólfur Arnórsson, *Sexstefja* 1) が挙げられる。 *hundrað* が通例「百二十」の *Grofhundert* の意味で用いられていた事実を考慮合わせると、印欧語本来の十進法と並行する形で、

十二進法的数え方が多かれ少なかれ普及していたことが分かる。

(11) 減算法的発想は、身近かなところでは、日本語・ドイツ語をはじめ多くの言語の時刻表現「X時Y分前」に見ることが出来る。「減算」という性格は、しかし、とりわけ現代アイスランド語の言い回し *klukkuna vantar korter í þriggja* 「時刻は三時に1/4欠ける(二時四十五分である)」に明瞭に現れている。

(12) *Blöndal/Stemman* (1943, S. 90 f.) 参照。同書には、*Napoleon kom við nunda mann hins nunda tugar* 「ナポレオンは九番目の十の九番目の男として(八十八人の男とともに)来た」という *Oberschwelvenzählung* の例も挙げているが、これはおそらく擬古的表現であろう。

(13) 語の構成に関しては序章および註2を参照。これらの数詞には短形があり、日常的にはこれを用いられる (Lockwood 1977, S. 64)。

(14) *Svabo* (1966, Sp. 10, 196, 590, 705, 725) 参照。

(15) *Hammershainb* (1891, Bd. 1, S. XCIVf.) 参照。

(16) この新約聖書における数詞の扱ひはきわめて不統一である。三桁数のおおつては *hundrað og fimti* og *trimum* 「百と五十と三」(Jh 21, 11) のやいな「十位十位」と、*tvey hundrað og seks* og *sjúfti* 「二百と六

と「十」(Apg 7, 37) の「十」が「十位十位」が讀取
されてゐる。しかし一九六一年度の旧約聖書に於て
は「十位十一位」の形式に於ては統一されたよう
である。なお、旧新約ともにラテン語式の二十進法
的の桁数は使用してゐない。

(17) 本数は halvtredsindstyvende 「四十進法」の「
十」を「半」に於て用ひたす。 Braumnüller (1991, S. 94 f.)
參照。

(18) Diderichsen (?1957, S. 59) 及び Braumnüller
(1991, S. 94) 參照。

原典類纂

ドイツ語

Die gotische Bibel. Hrsg. v. Wilhelm Streitberg.
Heidelberg 1971.

ドイツ・スウェーデン語

Brennu-Njáls saga (Njála). Hrsg. v. Finnur Jónsson.
Halle 1908.

Kristnisaga, Þáttur Þorvalds ens víðförla, Þáttur Ísleifs
biskups Gizurasonar, Hungrvaka. Hrsg. v. B.
Kahle. Halle 1905.

Hálfs saga ok Hálfsrekka. Hrsg. v. A. le Roy
Andrews. Halle 1909.

Laxdæla saga. Hrsg. v. Kr. Kálund. Halle 1896.

Egils saga Skallagrímssonar nebst den größeren
Gedichten Egils. Hrsg. v. Finnur Jónsson. Halle
1924.

Den norsk-islandske Skaldediktningen. Revideret
av Ernst A. Kock. 2 Bde. Lund 1946-1949.

Ares Isländerbuch. Hrsg. v. Wolfgang Golther.
Halle 1923.

丹麥語

Bibla. Það er Heilög Ritning. Ný þýðing úr frum-
málunum. Reykjavík 1966.

Biblia. Það er Halgabók Gamla Testamenti og
Nýggja. Kopenhagen 1970 [zuerst 1937 (NT)/
1961 (AT)].

Bibelen eller den Hellige Skrift. Det Gamle og det
Nye Testaments kanoniske bøger. Revideret
oversættelse av 1930. Oslo 1975.

Gammeldansk læsebog. Ved Nelly Uldaler og Gerd
Wellejus. Kopenhagen 1968.

Thet Nøye Testamenth. Christern II's Nye Te-

- stamente Wittenberg 1524. Faksimileausgabe. Kopenhagen 1950.
- Bibelen. Den Hellige Skrifts kanoniske bøger. Kopenhagen 1944 [Zuerst 1907 (NT)/1931 (AT)].
- Erik Noreen: Fornsvensk Læsebok. Utgiven av Sven Benson. Malmsø 1954.
- Bibeln eller den Heliga Skrift. Gamla och Nya Testament. De kanoniska böckerna. Översättningen gillad och stadfäst av konungen år 1917. Stockholm 1975.
- 參考文獻
- Blondal, Sigfus/Stemann, Ingeborg: Praktisk lærebog i islandsk nutidssprog. Kopenhagen 1943.
- Braune, Wilhelm/Ebbinghaus, Ernst A.: Gotische Grammatik. Tübingen 1919/73.
- Braunmüller, Kurt: Die skandinavischen Sprachen im Überblick. Tübingen 1991.
- Cleasby, Richard/Vigfusson, Gudbrand: An Icelandic-English Dictionary. Oxford 1957 [Nachdruck 1967].
- Comrie, Bernard: Balto-Slavonic. In: Indo-European numerals. Edited by Jandranka Gvozdanović. Berlin/New York 1992. S. 717-833.
- Diderichsen, Paul: Elementær dansk grammatik. Kopenhagen 1957 [3. udgave, 6. oplag 1974].
- Fritzer, Johan: Ordbog over det gamle norske sprog. 3 Bde. Oslo/Bergen/Tromsø 1973.
- Hammerich, Louis: Zahlwörter und Zahlbegriff. Mannheim 1966.
- Hammershainb, V. U.: Færøsk anthologi. 2 Bde. Kopenhagen 1891 [Nachdruck 1969].
- Heusler, Andreas: Altisländisches Elementarbuch. Heidelberg 1967.
- Lockwood, W. B.: An introduction to modern Faroese. Tórshavn 1977.
- Menniger, Karl: Zahlwort und Ziffer. 2 Bde. Göttingen 1958 [unveränderte 3. Aufl. 1979].
- Price, Glanville: Romance. In: Indo-European numerals. Edited by Jandranka Gvozdanović. Berlin/New York 1992. S. 447-496.
- Scardigli, Piergiuseppe: Die Goten. Sprache und Kultur. Übersetzt von Benedikt Vollmann. München 1973.
- Schrader, Otto: Zahlen. In: Reallexikon der indo-

germanischen Altertumskunde, Bd. 2. Berlin/
Leipzig 1929, S. 670-675.
Skautrup, Peter : Det danske sprogs historie. Bd. 2.
Kopenhagen 1947 [unveränderte 2. Auflage 1968].
Suprun, A. E. : Polabskij Jazyk. Minsk 1987.

Svabo, J. C. : Dictionarium faeroense. Færøsk-dansk-
latinsk ordbog. Udgivet efter håndskriftene af
Chr. Matras. I. Ordbogen. Kopenhagen 1966.
泉井久之助 : 印欧語における数の現象。東京 一九七
八。

(一橋大学助教授)